



Title	A STUDY ON USE OF BALE BALE FOR SHARED PLACE IN HIGH-DENSITY ISLAND
Author(s)	Abdul, Mufti Radja
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59940
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	アブドゥ ムフティ ラジャ Abdul Mufti Radja
博士の専攻分野の名称	博士 (工学)
学位記番号	第 25570 号
学位授与年月日	平成24年5月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科地球総合工学専攻
学位論文名	A STUDY ON USE OF BALE BALE FOR SHARED PLACE IN HIGH-DENSITY ISLAND (高密度の島における共有場としてのバレバレの利用に関する研究)
論文審査委員	(主査) 准教授 鈴木 毅 (副査) 教授 横田 隆司 教授 阿部 浩和 九州大学大学院人間環境学研究院教授 菊地 成朋

論文内容の要旨

本論文は、インドネシア、南スラウェシの州都マカッサル市の沖合にある、ラエラエ島における縁台的なしつらえバレバレ (Bale Bale) の利用実態調査を通して、高密度な島において環境を共有する仕組みについて分析と考察を行ったものである。

序では、研究の背景と目的について述べた。具体的には高密度居住環境の課題と、それに対処する仕組みの重要性を指摘し、その一つの実例であるバレバレを調査する意義と研究目標、研究手法を記した。また関連する公共及び共有の場所についての既往研究、及びインドネシア各地におけるバレバレの実態をまとめた。

第1章は、調査対象地であるラエラエ島の概況 (位置・歴史・公共施設・住民)、及びこの島におけるバレバレの概要 (数、位置、設置目的) に関する調査をまとめた。ラエラエ島は、主に漁業を営む約1550人、330戸が居住する約500×150mの細長い小島であるが、バレバレと呼ばれる広めのベンチ・縁台のような屋外家具が、島内のいたるところに置かれ、その数は全部で225である。また人々は多くの場合、自分でバレバレを制作し、主に家族が座ったり寝たりする目的のために自宅の近傍に自由に設置していることを明らかにした。

第2章では、ラエラエ島の全バレバレ225を対象として、その型式・構造・配置・利用についての調査分析を行い、以下にあげる事項を明らかにした。1) バレバレは設置場所 (住居との関係) によって、5つのタイプ、すなわち、伝統的住居の床下Siring、テラスTerrace、ヤードyard、道端roadside、浜辺seashoreに分けることができ、道端タイプが最も数が多い。2) 材料は主に木と竹で、部分的に金属が使用される。形態はベンチ的なものから屋根や壁のある小屋風のものまで様々であるが、タイプによって傾向があり、屋根付きは道端タイプ・浜辺タイプがほとんどである。3) 平面寸法は概ね1.5m×2m程度だが、道端・浜辺タイプには3m以上のものもあり、平面のプロポーションは1:1と1:2の間で一般的な日本の縁台よりずんぐりしている。同時に利用する人数は1人~16人と幅広く、面積とは明解な相関はない。4) 設置場所や形態 (屋根や壁) によって方向性があるバレバレも多く、その向きとしては街路が最も重視され、海だけを向くバレバレはごく少数で例外的である。また、バレバレは周辺にある木などを使って屋根をかけるなど、用途に応じて形態を変化させる事がしばしばある。5) バレバレは主に、休憩、会話、昼寝、食事、作業 (漁具の補修) などに使用される。最もよく利用されるのは道端タイプと浜辺タイプである。利用時間やタイプについて男性・女性で若干の違いがあり、住宅から離れた浜辺タイプは男性の利用がやや多い。

第3章では、バレバレの所有と利用実態の関係について調査分析を行った。その結果、以下の事項を明らかにした。1) バレバレは基本的に個人の私有物であり、所有者が自分の家族の利用のために住居の近傍に設置するものだが、

隣人、訪問者など誰でも使用する事ができ、バレバレの所有者であっても、自宅から離れた複数の他人のバレバレを日常的に利用することが一般的である。2) 多くの人々に利用されるバレバレは、良い眺め、日陰、風通しが良い、道路の角といった、快適な環境の特徴を持っている。3) バレバレを利用するグループにおける、所有者と利用者の関係は、家族のみ、家族以外のみ、両方の混在の3パターンがある。4) バレバレの型と利用者の関係については、一般に浜辺タイプ、道端タイプの利用が多く、道端タイプは家族と近隣の人々に、テラス・ヤードタイプは家族によって使われるといった傾向がある。

第4章は研究全体の結論である。バレバレは、1) (所有者でなくとも) より良い環境に移動させて利用することが許される。また生活要求の変化に対応した屋根の付加や増築等によって徐々に改良される。2) 自分でバレバレを所有している住民であっても、浜辺、街角、公共スペース等、環境条件の良い場に設置された他人のバレバレを思い思いに選択し遠出して利用している。3) その際、親族ではない近隣住民や来訪者の誰でも利用することができる、といった暗黙の使い方のルールによって、バレバレは、「公共的な空間を共同で設置する」「全員が平等に空間を提供する」とは違う方法で、良好な環境を共有するシステムである。さらに、この結論を踏まえ、バレバレに関する自治体への提言及び今後の研究へ向けての課題を整理した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、インドネシア、南スラウェシの州都マカッサル市の沖合にある、ラエラエ島の縁台的なしつらえであるバレバレ (Bale Bale) の実態調査を通して、高密度な島で環境を共有する仕組みの分析と考察を行ったものである。この種の屋外家具は日本をはじめアジア各国に存在しているが、主に漁業を営む330戸、人口約1550人の小島であるラエラエ島には225のバレバレがあり、島民の重要な生活の場となっている。本研究は文献調査と3回のフィールドワーク (アンケート、行動観察・マッピング、インタビュー) に基づく分析によって以下の研究成果をあげている。

(1) バレバレは主に木と竹製の屋外家具で、ベンチ的な形状から屋根や壁のある小屋風のものまで様々な形態があり、設置場所 (住居との位置関係) によって5つのタイプ (伝統的住居の床下Siring、テラスTerrace、ヤードYard、道端Roadside、浜辺Seashore) に分けられる。道端タイプが最も多く、屋根付は道端・浜辺タイプがほとんどである。平面寸法は概ね1.5m×2m程度だが、道端・浜辺タイプには3m以上のものあり、平面寸法比は1:1と1:2の間で日本の縁台よりずんぐりしている。設置場所等から方向性があるバレバレも多く、街路への向きが最も重視される。

(2) バレバレは、朝昼晩と、休憩、会話、昼寝、子守り、食事、家事、作業 (漁具の補修)、趣味 (ゲームや音楽) など様々な用途で使用される。同時に利用する人数は1~15人程度と幅広く、バレバレの面積とは明解な相関がない。最もよく利用されるのは道端タイプと浜辺タイプである。利用時間やタイプについて男性・女性で若干の違いがあり、住宅から離れた浜辺タイプは男性の利用がやや多い。また、浜辺、街角、公共スペースの近くなど、風通しや眺望、社会的接触の多さなど、環境条件の良い場に設置されたバレバレがよく利用される傾向がある。

(3) バレバレは基本的に個人の私有物であり、所有者が自分の家族のために住居の近傍に自由に設置しているが、隣人、島民、訪問者など誰でも使用する事ができる。主に家族や親族のみ、あるいは近隣のみで利用されるバレバレもあるが、家族・近隣に限られない場合も多く、自分でバレバレを所有している住民 (約55%) であっても、良い環境に設置された複数の他人のバレバレを思い思いに選択し、遠出して利用することが一般的である。

(4) バレバレは恒久的・固定的なセッティングではなく、家族が日陰を求めて時間ごとに移動させるのはもちろん、利用者が所有者の許可なしに、より良い環境に移動させて使用することが普通に行われる。また周辺にある樹木などを使って屋根をかけるなど、生活要求に対応して柔軟に要素を付加したり、増築して面積を増倍させるなど、年月を経るごとにその配置や形態をダイナミックに変化させていく事例がしばしばみられる。

(5) 以上よりラエラエ島のバレバレは、その柔軟な環境形成と暗黙の利用のルールによって「良好な環境を求めて設置された私有空間を皆で共有」しており、これまで知られている「公共空間を共同で設置する」「全員が平等に私有空間の一部を提供する」といった環境の共同利用とは違う方法で環境を共有するシステムを構成している。

以上本論文は、綿密な調査と分析によって、バレバレという独特の仕掛けを用いた居住・生活のシステムを明らかにしている。バレバレの歴史的変遷や宗教との関連性、他地域のバレバレとの比較や別環境への適用の可能性と限界

など、検討されるべき課題は残されているが、住居が密集した厳しい住環境エリアの中で良好な環境を共有する仕組みについての貴重な知見を提出しており、建築・都市計画、環境デザインの発展に寄与するところ大である。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。